

雲林院の菩提講

先ごろ

先つころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嫗と行き会ひて、同じ所に居ぬめり。

同じような老人たちだなあ

「あはれに、同じやうなるものさまかな。」

この老人たちが笑って、顔を見合わせて(そのうちの一人、大宅世継が言うことには、

と見侍りしに、これらうち笑ひ、見かはして言ふやう、

昔なじみの人と会って

「年ごろ、昔の人に対面して、いかで世の中の見聞くことをも聞こえ合はせむ、

現在の入道殿下(藤原道長)

このただ今の入道殿下の御ありさまをも申し合はせばやと思ふに、

うれしくもお会い申しあげたことだなあ

あはれに嬉しくも会ひ申したるかな。

今こそ安心して死後の世界への道にも参ることができません。

今ぞ心やすく黄泉路もまかるべき。

腹がふくれるような気持ちにするものだなあ。

思しき事言はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける。

このようであるから

かかれはこそ、昔の人はもの言はまほしくなれば、

穴を掘りては言ひ入れ侍りけめとおぼえ侍り。

かへすがへす嬉しく対面したるかな。さてもいくつにかなり給ひぬる。」

と言へば、いま一人の翁、

「いくつといふこと、さらにおぼえ侍らず。

私は亡くなった太政大臣の貞信公が

ただし、己は、故太政大臣貞信公、蔵人少将と申しし折の小舎人童、
大犬丸ぞかし。

あなたは

ぬしは、その御時の母后の宮の御方の召し使ひ、高名の大宅世継とぞ言ひ侍りしかな。

そとうすると

されば、ぬしの御年は、己には「よなくまより給へらむかし。」

自らが小童にてありし時、ぬしは二十五、六ばかりの男にてこそはいませしか。「と言ふれば、

世継、

「そうそう、そうでございました。」

「しかしか、さ侍りしことなり。さてもぬしの御名はいかにぞや。」

と言ふれば、

「太政大臣のお屋敷で元服いたしました時、（貞信公が

『おまえの姓はなんと言うか』と（ ）が

「太政大臣殿にて元服つかまつりし時、『きむちが姓はなにぞ。』と仰せられしかば、

『夏山となむ申す。』と申ししを、やがて、繁樹となむつけさせ給へりし。」

など言ふに、いとあさましうなりぬ。

（参会者の中の）誰でも、少しは身分もあり教養もある者たちは、（老人たちの方を）見たり、にじり寄りたりなどした。誰も少しよろしき者どもは、見おこせ、居寄りなどしけり。

（その中の）年は三十歳ぐらいの侍らしく見える者が、しきりに近くに寄って、

年三十ばかりなる侍めきたる者の、せちに近く寄りて、

「なあ、

「いで、いと興あること言ふ老者たちかな。さらばこそ信ぜられぬ。」

顔を見合わせて

と言へば、翁二人見かはしてあざ笑ふ。

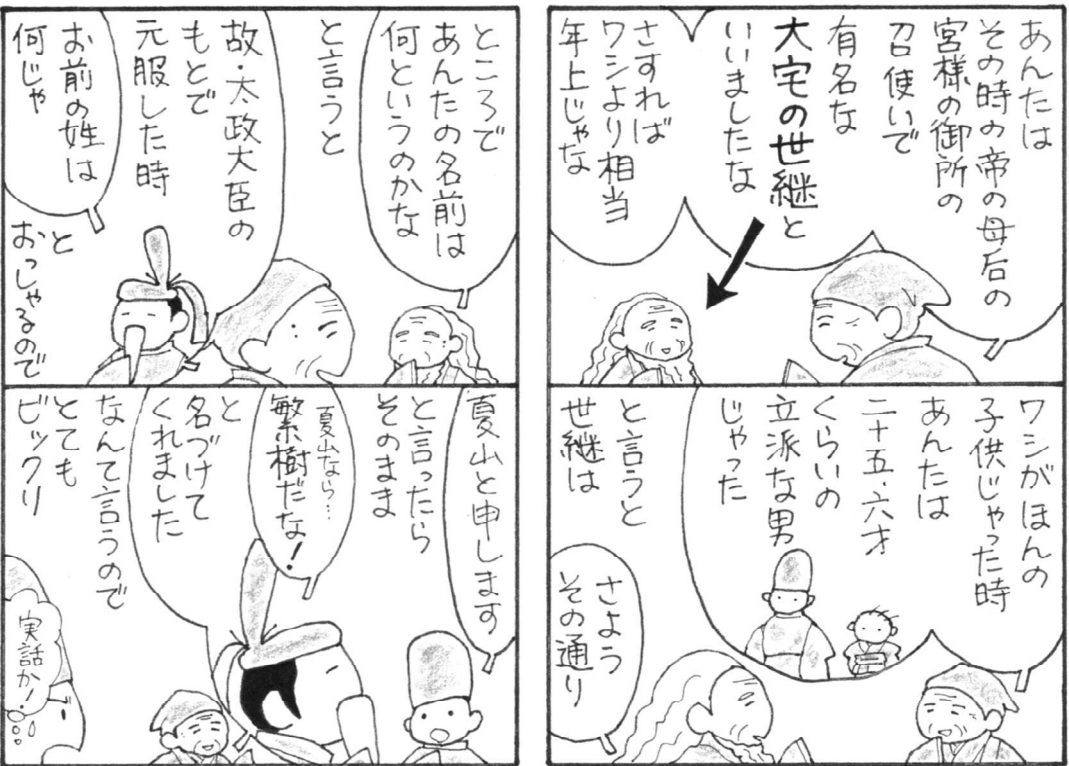
単語・語句解説

- 「うたてげなる翁」異様な感じのする老人。
- 「聞こえ合はせむ」お話し合い申したい。
- 「まかるべき」参ることができません。「まかる」は「行く」の謙譲語。
- 「さらにおぼえ侍らず」全く覚えておりません。
- 「言ひ侍りしかな」言いましたなあ。
- 「いませしか」いらっしやいました。
- 「しかしか」相槌に用いる感動詞。
- 「つけさせ給へりし」おつけになりました。
- 「少しよろしき子ども」少しは身分もあり教養のある者たち。
- 「居寄り」にじり寄ったり。

雲林院の菩提講で、百九十歳くらいの大宅世継（おおやけのよつぎ）というおじいさんが、百七十歳の夏山繁樹（なつやまのしげき）というおじいさんとその妻（いずれも架空の人物）に昔のことを語るのを、作者が書き留めた、という形式

菩提講

極楽往生を求めるために、法華経を講説する法会。



「雲林院の菩提講」の現代語訳

先ごろ、(私が)雲林院の菩提講に参詣しましたところ、普通の人よりは格別に年をとり、異様な感じのする老人二人と、老女(一人)とが来合わせて、同じ場所に座っていたようです。「本当にまあ、同じような老人たちだなあ。」と見ておりましたところ、この老人たちが笑って、顔を見合わせて(そのうちの一人、大宅世継が)言うことには、「長年、(私は)昔なじみの人と会って、なんとかして世の中の見聞きしたことを(互いに)お話し合い申したい、(また)現在の入道殿下(≡藤原道長)のご様子をも(互いに)お話し合い申したいと思っていたところ、本当にうれしくもお会い申しあげたことだなあ。今こそ安心して死後の世界への道にも参ることができません。思っていることを言わないのは、本当に(ことわざにあるように)腹がふくれるような気持ちができるものだなあ。このようであるから、古人は何か言いたくなる、穴を掘っては(言いたいことをその中に)言い入れたのであろうと思われる。本当にうれしくもお会いしたものだなあ。ところで(あなたは)幾つにおなりになったのですか。」と言うと、もう一人の老人(≡夏山繁樹)が、「幾つということは、全く覚えておりません。しかし、私は、故太政大臣貞信公(≡藤原忠平)が、(まだ)蔵人の少将と申しあげた頃の小舎人童であった)、大犬丸であるよ。あなたは、その(宇多天皇の)御代の母后の宮(≡皇太后)様の召し使いで、有名な大宅世継と言いましたなあ。そうすると、あなたのお年は、私よりはこの上なく上でいらつしやるでしょうよ。私が(まだほんの)子どもであった時、あなたは二十五、六歳くらいの(一人前の)男でいらつしやいました。」と言うようなので、世継は、「そうそう、そうでございました。ところであなたのお名前はなんとおっしゃいましたか。」と言うようなので、(繁樹は)「太政大臣のお屋敷で元服いたしました時、(貞信公が)『おまえの姓はなんと言うか。』とおっしゃいましたので、『夏山と申します。』と申しあげたところ、そのまま、(夏山にちなんで)繁樹とおつけになられました。」などと言うので、(私はあまりに古い話に)たいそう驚きあきれてしまった。(参会者の中の)誰でも、少しは身分もあり教養もある者たちは、(老人たちの方を)見たり、にじり寄りたりなどした。(その中の)年は三十歳くらいの侍らしく見える者が、しきりに近くに寄って、「さあ、たいそうおもしろいことを言う老人たちですなあ。全く信じることができない。」と言うと、老人二人は(お互いの)顔を見合わせて大声で笑う。